



Title	名詞被覆形「コ〔木〕」の様相
Author(s)	蜂矢, 真弓
Citation	語文. 2004, 86, p. 53-63
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69075">https://hdl.handle.net/11094/69075</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 名詞被覆形「コ〔木〕」の様相

蜂 矢 真 弓

有坂（一九三一）は、上代において、

（a）エ列イ列に終る形はそれが单語の末尾に立つ場合にも用  
るられ得るもの

（b）ア列ウ列オ列に終る形は、そのあとに何か他の要素がつ  
いて一語を作る場合にのみ用ゐられるもの

として、（a）を「露出形」、（b）を「被覆形」と名付けた。そ  
の上で、筆者は、前稿「名詞被覆形・露出形の型の通時的相違」<sup>(1)</sup>  
において、複合語の前項部の場合のみについて、有坂が述べてい  
る上代の「被覆形」・「露出形」と、平安時代以降の被覆形形態  
素・露出形形態素とを合わせて被覆形・露出形として扱った。そ  
して、有坂（一九三一・一九三四）の「被覆形」—「露出形」の  
末尾の四つの法則、①ア列—エ列乙類、②ウ列—イ列乙類、③オ  
列甲類—イ列乙類、④オ列乙類—イ列乙類を受けて、前稿では、

右の有坂の四つの法則を、被覆形形態素—露出形形態素の末尾に  
ついては①ア列—エ列、②ウ列—イ列、③オ列—イ列とし、さら  
に、I型=①・①、II型=②・②+④<sup>(2)</sup>・③として、I型・II型の  
異なり語数と延べ語数の表を作つて検討した。すると、I型は、  
上代～室町・戦国時代を通して常に被覆形の異なり語数・延べ語  
数が50%を越える、つまり、常に露出形よりも被覆形の方が勢力  
が強いのに対し、II型は、上代では被覆形の異なり語数・延べ語  
数が50%を越えるが、平安中期以降は被覆形の異なり語数・延べ  
語数が50%を下回る、つまり平安中期以降は勢力が逆転して被覆  
形よりも露出形の方が勢力が強くなる、ということが分かった。  
それに對し、本論文ではまず、II型の被覆形と露出形の勢力が  
逆転する時期についてより詳しく見るために、II型を、②・②と  
④・③に分けて検討することにする。

右のように分けた表は、次の通りである。<sup>(3)</sup>

④	②	①									
			「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」
			「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」
④	②	①									
			「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」
0	2	5	13	5	43						
0	3	11	23	6	78						
						100%	72.2%	89.6%	92.9%	92.9%	92.9%

平安中期（土左日記・蜻蛉日記）

(\*は算出不能)

③	②	①									
露出形形態素	被覆形形態素										
2	2	6	0	7	23						
2	6	9	0	11	58						
50.0%		*	%		76.7%						
75.0%		*	%		84.1%						

鎌倉・南北朝（覚一本（高良本）平家物語・徒然草）

③	②	①											
露出形形態素	被覆形形態素												
4	3	11	3	29	40								
12	3	24	6	51	102								
42.9%		21.4%	%		58.0%								
20.0%		20.0%	%		66.7%								

③ ④		② ②		① ①									
露出形	被覆形	露出形	被覆形	露出形	被覆形								
17	13	63	16	83	148	異なり語数	被覆形の						
213	71	226	63	363	840	延べ語数	異なり語数の%	延べ語数の%					
		43.3%		20.3%	64.1%								
		25.0%		21.8%	69.8%		被覆形の						

総計

③		②		①									
露出形形態素	被覆形形態素	露出形形態素	被覆形形態素	露出形形態素	被覆形形態素								
10	4	32	2	42	58	異なり語数	被覆形形態素の						
182	21	73	30	178	272	延べ語数	異なり語数の%	被覆形形態素の					
				28.6%	5.9%		58.0%	被覆形形態素の					
				10.3%	29.1%		60.4%	被覆形形態素の					

被覆形と露出形の勢力が逆転するか否かという点で、I型とII型は大きく異なるのであるが、この表のようにII型の中を②・②と④・③に分けて比べると、②・②は平安中期以降に完全に勢力を逆転して、被覆形よりも露出形の方が勢力が強くなるが、④・③の被覆形の勢力は、小さくなり始めるのは平安中期、露出形と逆転し始めるのは鎌倉・南北朝時代、完全に逆転するのは室町・戦国時代まで下る。この、④・③の被覆形と露出形の勢力が逆転する時期が、②・②と比べて遅れるということについて考えたためには、勢力が逆転し始めた鎌倉・南北朝時代、及び、勢力が完全に逆転した室町・戦国時代においての④の被覆形形態素について考える必要があると思われる。

コ	異なり語数
9	
41	延べ語数
64.9%	異なり語数の%
69.5%	延べ語数の%

そこで、鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代における④の被覆形形態素の異なり語数と延べ語数を範囲を広げて調べたところ、「コ」「木」が六割以上を占めた。左は、鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代における④の被覆形形態素全ての中で、「コ」「木」が占める割合を示した表である。

例をいくつか挙げると次のようである。

コガクレ〔木隠〕

：にんぎやうばかりを、こかくれにのこしをきて、…（『土井本太平記』卷七）

コカゲ〔木陰〕

：三百よきを、ふた手にわけ、とうざいの山のこかけより、

…（『土井本太平記』卷三）

コガラシ〔木枯〕

：萌黄裏つけたる竹笠、こがらしにふきそらせ、…（『曾我物語』卷一）

コクソ〔木糞〕

：城ヲ築テコクソヲカウテ地ヲシテ漆テ塗フト云ソ（『史記抄』卷一六）

コグレ〔木暮〕

暫〔しばら〕支〔へ〕テ、口手〔ゆで〕ノコグレノ中〔なか〕へ落〔おち〕ケリ。（『延慶本平家物語』第四）

コサキ〔木先〕

家〔鷹〕ハ茶ノ細ナコサキソ（『山谷抄』卷三）

コダテ〔木楯〕

：たけの一むら、しけりたるをこたてにとつて、さしつめひきつめ、…（『土井本太平記』卷八）

コダネ〔木種〕

八十木種〔木種〕（略）此ハイクラモ多イ木種ヲ云ソ（『日本書紀

## 桃源抄 中<sup>(5)</sup>

コダマ〔木靈〕

：山ビコ〔木靈〕ノ如ニ罰〔罰〕テ通りケレバ、…（『延慶本平家物語』第四）

…ソント語レハコタマカヒ、クホトニソ（『四河入海』卷二ノ四）

これらの「コ〔木〕」の例のうち、「コガクレ」・「コカゲ」・「コガラシ」・「コダマ」は『源氏物語』、『コダネ』は『日本書紀』ト部兼方本訓から見られるが、「コクソ」・「コグレ」・「コサキ」・

「コダテ」は鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代から見られるものである。つまり、鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代における団の被覆形形態の中で六割以上を占めている「コ〔木〕」は、その時代になつても、造語力が残っているということが分かること。

## 二

その「コ〔木〕」について、さらに詳しく考える必要があると思われるため、前稿では表に取り入れなかつた「キ+ノ+コ」「」という形態などの例について考えることにする。なお、「コノハ」のように間に連体助詞が入っている例は、前稿では、「被覆形+連体助詞+名詞」は一語と思われるが、「露出形+連体助詞+名詞」は形態上一語か三語かの区別がつかないので、今回はどちらも採取しない、という方式を取りカウントしなかつた。し

かし、ここでは、被覆形「コ〔木〕」について見るのであり、前稿で述べた通り、「被覆形+連体助詞+名詞」は一語と思われるのと、「コノハ」のような形を含む例についても調査範囲内とする。なお、これ以降は、鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代に限らず、その前後を含む広い時代の用例について見ていくことにする。<sup>(6)</sup>

まず、前稿に使用した文献の中に、「キギノコズエ〔木々の梢〕」の例があつた。

キギノコズエ

山風に堪へぬ木々のこずゑも、峯の葛葉くずばも、心あわたゞしう、  
あらそひ散るまぎれに、…（『源氏物語』夕霧）

三もんしかきたるはたとも、六十よなけれ、きゞのこすゑに  
ひるかへりて、へんくたるそのかけに、…（『土井本太平記』卷十七）

そこで、さらに他の文献についても見てみると、まず、以下のようない例が見付かれた。

キギノコズエ

簾すだれを少し捲きあげ給へるに、木々の梢こすゑも色づき渡りて、さ  
と吹入れたり。（『狹衣物語』卷一）

このごろはききのこずゑにもみぢしてしかこそはなけあきの  
山さんざと（『後拾遺和歌集』三四四・藤原兼房朝臣）

香隆寺に参るにてみれば木々の梢こすゑももみちにけり（『讀岐典侍日記』下）

風のさと吹たるに、木々の木末ほろ／＼と散りみだれて、御琴にふりかゝりたるやうに散りおほひたる、折さへいみじきに、…（『夜の寝覚』卷五）

さるまゝに涙の雨の紅いろに、木々の梢こすゑもそめぬべし。（『保元物語』下）

木々ノ梢モ滋ケレバ、友マヨワセル所モアリ。（『延慶本平家物語』第五本）

愚おろかなるかな筑波嶺つくばねの。木々の梢こすゑにも羽をしき波の浮巢うきすをも  
かけよかし。（謡曲『善知鳥』）  
うたてやなこの葛城山くづらきやまの雪ゆきの中に。ゆひ集めたる木々の梢こすゑを。  
標しと知しろし召めされぬは御心おんじなきやうにこそ候まへ（謡曲『葛城』）

げにげに見れば山風の。木々の梢こすゑに吹き落ちて…（謡曲『桜川』）  
不思議ふしきやな頃ころは霜降しもふり月つきなれば。木々の梢こすゑも冬枯ふぶくれて。氣色寂けしきぢやく  
しき社頭しゃとうの御垣みかきに。盛りなる紅葉もみぢ一本見えたり。（謡曲『龍田』）

Oigumo cozuye. (木々の梢) 木々の小枝の先端. (邦訳

日葡辞書) 木々の梢こすゑも茂りつゝ、空に鳴きぬる蟬せんの聲こゑ、…（『御伽草子』

「浦嶋太郎」）

つねは岩の間に花を見、秋は木々のこすゑにて月をながめ、万の木の實を愛し、いとやさしき色好みにておはしける。

〔『御伽草子』「のせ猿さうし」〕

キギノコノハ

わがきつの方もしられずくらぶ山木木のこのはのちるとまがふに〔『古今和歌集』二九五・ただみね〕雪ふれば木々のこのはも春ならでをしなべ梅の花ぞ咲きける

〔『和泉式部日記』〕

その夜の時雨つねよりも木ゝの木の葉のこりあげもなく聞ゆるに、〔『和泉式部日記』〕

露のおきし木木のこのはをふくよりはよにも風の身をさせはなむ〔『和泉式部統集』六一六〕折シモ空カキ曇リ打時雨レ、木々ノ木葉モ乱レツヽ、〔『延慶本平家物語』第六末〕

仁治三年大嘗會に外記廳内の蘿木の梢に臥せる法師の事  
仁治三年大嘗會に、人おほくまいりつどひけるに、外記廳のうち、東のかたなるものちの木の梢に、髪おつかみなる法師一人ふしたりけり。〔『古今著聞集』卷十七一六一〇〕

モチノキノコズエ

はるかなる瀧にさしおほひたる杉の木あり。その木の梢に、さけぶ聲しけり。〔『宇治拾遺物語』一六九〕

其樹ノ梢ニ昨日ノ雨カタマリテアリタヲ知ラヌ也〔『中華若木詩抄』卷之下〕

ソノキノコズエ

岩のそばに桜の木一本あり。高潮満つ折は、この木の梢に宿り、〔『とはすがたり』卷四〕

キギノコノシタ

こしたもといどひがたきたび夜のしらつゆはらふきざのこ

のした〔『新勅撰和歌集』一三六九・權中納言俊忠〕

これらの「キギノコノコ」の形態の例は、「キ〔木〕」と

「コ〔木〕」とで意味が重複している。これらは、複数であることを表すためには重複せざるを得なかつたとも思われるが、「キギノコズエ」については「コズエドモ」、「キギノコノハ」については「コノハドモ」によって複数であることを表せることからすると、「キギノコノコ」の形態の例が出現した『古今和歌集』

以降の平安中期の時点から、被覆形形態素である「キギノコノコ」の「コ」が「キ〔木〕」の意味であるという認識が薄れ始めたものと考えられる。

次に、以下のような例がある。

コノキノコズエ

岩のそばに桜の木一本あり。高潮満つ折は、この木の梢に宿

り、〔『とはすがたり』卷四〕

カシハギノコノシタカゼ

村雨のおどろくしきに、柏木の木下風涼しう吹入りたれ

(ば)、〔『狹衣物語』卷二〕

また、次のような例もある。

タイボクノコズエ

：怪ミ見タテマツルホドニ、彼ノ庭前ノ大木ノ梢ニゾ現

ゼサセ給ケル。〔延慶本平家物語〕第一本)

これらの「□キ十ノ+コ□」の形態の例も、「キ〔木〕」と

「コ〔木〕」とで意味が重複している。しかし、「コノキ」・「ソノ

キ」・「モチノキ」・「サクラノキ」・「カシハギ」や「タイボク」で

一単語として固定する力の方が強かったため意味が重複したもの

と思われ、「□キ十ノ+コ□」の形態の例が多く見られる鎌

倉・南北朝時代頃から、被覆形容態素である「□キ十ノ+コ□」

の「コ」が「キ〔木〕」の意味であるという認識が、平安中期に出現した「キギ十ノ+コ□」の「コ」よりもさらに薄れて

きたものと考えられる。

因みに、次のような例もある。「□キ十ノ+コ□」の形態

の例ではないが、参考までに挙げておく。

コノハノコカゲ

堪雨亦木ノ葉コカケヲ取〔杜詩統翠抄〕卷五)

そして、前稿に使用した文献の中に「キ十ノ+コ□」の例があ

った。「キノコダチ〔木の木立〕」である。

キノコダチ

山のけしき木のこだちに至るまで外よりもなを勝たり〔覚

一本平家物語〕卷二)

そこで、さらに他の文献について見てみると、以下のような

例が見付かった。

キノコダチ

山の姿木の木立。これこそ我等が住むべき所にて候へ〔謡

曲『善界』)

キノコズエ

東三條には、院のかたのつはものともあつまりて、よるはむほんをたくみ、ひるは木のこずゑ山の上にのぼりて、…

〔保元物語〕上)

木ノ梢ノヌケテタ體ソ〔蒙求抄〕卷一)

標ハ木ノ梢也〔蒙求抄〕卷一)

言ハ人ノヒタイト木ノ梢ハチャトミユルホトニ云ソ〔蒙

求抄〕卷二)

標奇ハ木ノ梢ノサシ出タル如ク人ニスクレタル處ナリ〔蒙

求抄〕卷七)

木ノ杪ニコズエトヨムソ〔詩學大成抄〕卷九)

キノコケラ

肺ハ碎木札也トテ木ノコケラト云心モアリ〔史記抄〕卷一

四)

竹ノキリクヅ、木ノコケラナドトリヲキ〔玉塵〕卷四)

キノコグチ

木口木ノ。〔書言字考節用集〕第八冊)

また、間に「ノ」は入っていないが、次のような例もある。

キゴマイ

Qigomai. キゴマイ（木木舞・木桶） 垂木の上に取り付け

る細長い木の板。（『邦訳日葡辞書』）

これらは、複数であることを表すためでも「単語として固定する力の方が強かったためでもなく、そのような特別な理由もなしに、「キ〔木〕」と「コ〔木〕」とで意味が重複している。「キ+ノ+コ〔木〕」の形態の例が多く見られる室町・戦国時代頃から、被覆形容素である「キ+ノ+コ〔木〕」の「コ」が「キ〔木〕」の意味であるという認識が、鎌倉・南北朝時代頃に多く見られた「キ+ノ+コ〔木〕」の「コ」よりもさらに薄れてしまい、「キ+ノ+コ〔木〕」の「コ」に形骸化が起こったものと考えられる。このように、「キギ+ノ+コ〔木〕」・「キ+ノ+コ〔木〕」・「キ+ノ+コ〔木〕」の三つの形態からすると、「キギ+ノ+コ〔木〕」の形態が出現し始めた平安中期から、「キ+ノ+コ〔木〕」の形態が多く見られる鎌倉・南北朝時代を経て、「キ+ノ+コ〔木〕」の形態が多く見られる室町・戦国時代にかけて、右の三つの形態をとる「コ〔木〕」の「コ〔木〕」の意味が「キ〔木〕」であるという認識が薄れていき、「キ+ノ+コ〔木〕」の「コ」に形骸化が起つたといふことが考えられる。

さて、「キギ+ノ+コ〔木〕」・「キ+ノ+コ〔木〕」・「キ+ノ+コ〔木〕」のように、「名詞露出形+ノ+同一の名詞の被覆形容形〔木〕」の形態をとることから、名詞の被覆形容の意味が名詞の露出形容の意味と同一であるという認識が薄れていることが分かる例として、他に「サケノサカナ」、「メノマヘ」がある。

サケノサカナ

酒のさかなにあさのほとりのちしやは　さけのさかなに五  
条へまいればちさのは（『田植草紙』酒來時之哥）

メノマヘ

おもほん（『古今和歌集』五一〇）

しかしこれらは、それぞれ「サケノサカナ」・「メノマヘ」の例のみで、他に「サケ十ノ+サカ〔木〕」・「メ十ノ+マ〔木〕」の例がある訳ではない。つまり、「サカ〔酒〕」・「マ〔目〕」そのものの意味が薄れてしまつたということではないということである。ところが「コ」の場合は、「コ〔木〕」そのものの意味が薄れてしまつていると言える。

右の三つの形態をとる「コ〔木〕」の異なり語数は、「コズエ」・「コダチ」・「コケラ」・「コグチ」・「コマイ」・「コノハ」・「コノシタ」・「コノシタカゼ」の八例もある。これは、右の三つの形態をとる「コ〔木〕」に限つて「コ〔木〕」の意味が薄れていつたではなく、「コ〔木〕」そのものの意味が薄れていき形骸化が起つたことを示していると考えられる。

よつて、「キギ+ノ+コ〔木〕」の形態の例が出現し始めた平安中期から、「キ+ノ+コ〔木〕」の形態の例が多く見られる鎌倉・南北朝時代を経て、「キ+ノ+コ〔木〕」の形態の例が多く見られる室町・戦国時代にかけて、「コ〔木〕」そのものの意味がますます薄れていつてしまつたと考えられる。

①・②・③いずれにおいても、時代が下るにつれて被覆形の勢力が弱くなつていき露出形の勢力が強くなつていて、故に、「コ□」が存在することが難しくなつて来れば、その「コ□」が衰退するか、「キ□」に変化するかのどちらかの道を歩むはずである。例えば「コズエ」の場合で考えると、「コズエ」が衰退するか「キズエ」に変化するかのどちらかの道を歩むことになる。ところが、「コズエ」は衰退する道も「キズエ」への変化の道も歩まない。露出形の勢力が強くなつていくことによつて、「コズエ」の「コ」の意味が薄れていき、「コズエ」という語の存在がますます難しくなついくにもかかわらず、「コズエ」はどちらの道も歩まない。それは、露出形の勢力が強くなつていくことによつて「コ（木）」の意味が薄れしていく一方で、第二節に述べたように「コ（木）」に造語力が残っていることに起因していると見られる。

そのことは、以下のようにあつたと考えられる。意味が薄れていいくということに対しても、造語力が残っているという矛盾した現象が何故起るのかという点に問題は残るが、「コ（木）」は、意味が薄れしていく一方で造語力が残っているという特殊な性質を持っている。つまり、露出形の勢力が強くなつていくことによつて「コ（木）」の意味が薄れしていく一方で、「コ（木）」に造語力

が残っているため、「コ□」の形態は力を持つているということである。そのため、「コズエ」は、衰退する道でも「キズエ」への変化の道でもなく、「コズエ」という形態は保ったまま、その上に「キ」を付ける形態を取る道を歩んだ。「コ（木）」の意味が薄れ始めた平安中期の時点では「キギノコズエ」になり、もつと意味が薄れると「キノコズエ」になり、それがさらに意味が薄れた結果「キノコズエ」になるという道である。この「キノコズエ」の「コ」が形骸化という状態である。

このような「キナノコ□」の「コ」の形骸化を引き起こすに至つた、意味が薄れしていく一方で造語力が残っているという、矛盾した特殊な性質を持っているが故に、「コ（木）」の被覆形の勢力は、小さくなり始めるのは平安中期、露出形の勢力と逆転し始めるのは鎌倉・南北朝時代、完全に逆転するのは室町・戦国時代となり、平安中期に完全に逆転した②・②と比べると時期は下る。そしてその結果、もともと種類が少ない上に「コ（木）」が六割以上を占める④・③の被覆形は、露出形と勢力が逆転する時期が②・②に比べて遅くなるものと考えられる。

注  
 (1) 「国語語彙史的研究」二十五(二〇〇六 和泉書院)  
 (2) 前稿において、「クロ（黒）—クリ（涙）」を調査対象外としたことによつて、明らかに有坂（一九三一・一九三四）の③に該当するものはないことになった。甲乙不明のため③・④のどちらであるかが分からぬものについては④に含めてある。

(3) 使用文献は、前稿同様以下の通り。

『萬葉集総索引』(平凡社)、『萬葉集』(新編日本古典文学全集 小学館)、大野晋「上代仮名遣の研究」(岩波書店)、「土左日記総索引」(日本大学人文科学研究所)、「かげろふ 日記 総索引」(風間書房)、「源氏物語大成」(中央公論社)、「米花物語 本文と索引」(武蔵野書院)、「平家物語総索引」(学習研究社)、「平家物語」上・下(日本古典文学大系 岩波書店)、「徒然草総索引」(至文堂)、「土井本太平記 本文及び語彙索引」(勉誠出版)、「天草版平家物語総索引」(勉誠社)、「天草版平家物語」(勉誠社文庫)

(4) 使用文献は以下の通り(注(3)に挙げたもの以外の文献を挙げる)。

『保元物語総索引』(武蔵野書院)、「半井本平治物語 本文および語彙索引」(武蔵野書院)、「保元物語 平治物語」(日本古典文学大系 岩波書店)、「字治拾遺物語総索引」(清文堂)、「宇治拾遺物語」(日本古典文学大系 岩波書店)、「無名草子 総索引」(笠間索引叢刊47)「校注 無名草子」(笠間書院)、「曾我物語総索引」(至文堂)、「曾我物語」(日本古典文学大系 岩波書店)、「とはづがたり総索引【自立語篇】」(笠間索引叢刊99)、「とはづがたり」(新日本古典文学大系 岩波書店)、「延慶本平家物語」本文篇・索引篇(勉誠社)、「抄物資料集成」(清文堂)

(5) 「日本書紀」からの引用部分である。  
…夫須<sup>ノ</sup>噉<sup>ハ</sup>十木<sup>ノ</sup>種<sup>ク</sup> …〔ト部兼方本日本書紀〕神代・

(6) 「梢」等、確例でないものもあるが、他の読み方は考えられないことから、判断材料となる用例を広く挙げるために、第三節に限つては、確例でないものも含めることとする。

(7) 「コズエドモ」の用例には以下のようなものがある。

「げに、まだほのかなるこずゑどもの、…」(『源氏物語』藤裏葉)

…いつしかと夕月夜さし出でて、稍<sup>すこ</sup>ともいとゞおもしろく見渡されたり。(『狹衣物語』卷四)

…いま開けそむる花の木木ども、似る物なきほどなるに、…(『夜の寝覚』卷四)

『源氏物語』・『狹衣物語』・『夜の寝覚』には、「キギノコズエ」と「コズエドモ」の両方の例がある。

(8) 「コノハドモ」の用例には以下のものがある。  
…こ暗う繁れりし木の葉ども残りなく散り乱れて、…(『更級日記』)

#### 【参考文献】

有坂秀世(一九三一)「国語にあらはれる一種の母音交替について」

(一九三四)「母音交替の法則について」

〔国語音韻史の研究 増補新版〕一九五七 三省堂

川端善明(一九七九)『活用の研究』II(一九九七 清文堂出版)

【使用文献】(注(3)・(4)に挙げたもの以外の文献を挙げる。)

「新編国歌大観」(角川書店)、「狹衣物語語彙索引」(笠間索引叢刊50)、「狹衣物語」(日本古典文学大系 岩波書店)、「讀岐典侍日記本文と索引」(おうふう)、「夜の寝覚総索引」(明治書院)、「夜の寝覚」(日本古典文学大系 岩波書店)、「御伽草子総索引」(笠間索引叢刊91)、「御伽草子」(日本古典文学大系 岩波書店)、「謡曲」(百五十番集索引)(赤尾照文堂)、「謡曲大観」(明治書院)、「邦訳日葡辞書」(岩波書店)、「和泉式部日記総索引」(武蔵野書院)、「更級日記總索引」(武蔵野書院)、「土佐日記 かげろふ日記」(日本古典文学大

系 岩波書店)、『古今著聞集総索引』(笠間索引叢刊12)、『古今著聞集』(日本古典文学大系 岩波書店)、柳田征司『詩学大成抄の国語学的研究』影印篇・研究篇(清文堂)、『中華若木詩抄 卷之下 文節索引』(笠間索引叢刊83)、『中華若木詩抄』(勉誠社文庫)、『抄物大系別巻 玉塵抄』(勉誠社)、中田祝夫・小林祥次郎編『書言字考節用集研究並びに索引』(勉誠社)、『國寶日本書紀神代卷』(法藏館)

—本学大学院博士後期課程—